仙台市文化財調査報告書第42集

宮城県仙台市

郡山遺跡

――宅地造成に伴う緊急発掘調査報告――

1982・3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第42集

宮城県仙台市

郡山遺跡

――宅地造成に伴う緊急発掘調査報告――

1982・3

仙台市教育委員会

序　　文

郡山遺跡は古くから古瓦や土師器の散布する所として注目を浴び、仙台市内にある著名な遺跡として知られてきた所でもあります。しかし、都市化の影響を受け、近年宅地開発が急速化しつつあり、今回の調査は宅地造成に伴う緊急発掘調査として実施したものであります。

郡山遺跡は昭和54年に初めて調査が実施され、また、昭和55年度より５ケ年計画で緊急範囲確認調査が実施され、これまでの調査の結果から、柵木と大溝をもって外郭とする施設が検出され、推定方四町の広範囲にわたって区画された古代官衙跡であり、造営年代が７世紀末から８世紀初頭という多賀城以前に遡る可能性もあるという。古代東北の開拓史を解明する上で貴重な遺跡といえます。

今回の調査は、推定方四町の官衙に付属して造営されたと考えられる推定方二町の寺院跡の西辺部にあたるところ約1,100㎡が対象となり、掘立柱建物跡、何らかの区画施設と考えられる二列の材木列、土壙、溝跡の遺構群が発見され、多くの成果を得ることができました。本書はその成果についてまとめ上げた貴重な報告書であります。

この調査や報告書の作成にあたり、地権者庄子善重氏をはじめ、多くの方々の御協力をいただきました。ここに深甚なる感謝を申し上げます。

本報告書は市民各位はもとより、学徒諸兄の参考・活用を念ずるとともに、当市の文化財保護思想の普及啓蒙の一助となれば幸いに存じます。

昭和57年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は仙台市郡山に所在する郡山遺跡第13次発掘調査の報告書である。

2．本調査の経費は、原因者庄子善重氏の負担による。

3．本文の執筆は下記のとおり分担した。

本文執筆　　Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ１～３……青沼一民

Ⅲ４……木村浩二

遺構トレース……斎藤誠司、谷津妙子

遺物実測・トレース……村田晃一、芳賀英実、青沼一民、赤井沢まり子、谷津妙子

編集は木村、青沼が行った。

4．遺構図の平面位置図は相対座標で高さは標高値で記した。

5．平面位置を表示する相対座標は、相対座標点を任意に設置したNo.１原点（Ｘ＝０、Ｙ＝０）としている。

6．文中で記した方位角は真北線を基準としている。

7．郡山遺跡の遺構略号は次のとおりとした。

ＳＡ　柱列跡・柵木列・杭列

ＳＢ　建物跡

ＳＤ　溝　跡

ＳＥ　井戸跡

ＳＩ　竪穴住居跡・竪穴遺構

ＳＫ　土　　壙

ＳＸ　その他の遺構

8．本報中の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐原：1970) を使用した。

目　　次

序　　文
例　　言
Ⅰ　はじめに……1
Ⅱ　調査に至る経過……5
Ⅲ　第13次発掘調査……6
1．調査経過……6
2．発見遺構……6
3．出土遺物……17
4．ま と め……20

図 版　目 次

図版1　郡山遺跡航空写真……23
図版2　調査区全景……24
図版3　ＳＢ113掘立柱建物跡……24
図版4　ＳＢ113掘立柱建物跡、西2・南1掘り方セクション……25
図版5　ＳＢ113掘立柱建物跡、西1・南2掘り方セクション……25
図版6　ＳＢ113掘立柱建物跡、西1・南3掘り方セクション……25
図版7　ＳＢ114掘立柱建物跡、南1・東2掘り方セクション……26
図版8　ＳＡ104材木列セクション……26
図版9　ＳＡ103材木列底面検出状況……26
図版10　ＳＡ104材木列底面検出状況……27
図版11　ＳＡ104材木列セクション……27
図版12　ＳＫ119土壙セクション……28
図版13　ＳＫ122土壙セクション……28
図版14　ＳＫ120土壙全景……28
図版15　ＳＸ118遺物出土状況……29
図版16　ＳＸ118全景……29
図版17　出土遺物……30
図版18　出土遺物……31

Ⅰ はじめに

１．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課

課　　長　　永野昌一

主幹兼文化財調査係長　早坂春一

文化財調査係　主事　木村浩二、教諭　青沼一民

発掘調査に際して、郡山遺跡発掘調査指導委員会の先生方及び諸機関から御教示をいただき、記して感謝したい。

東北学院大学文学部教授　伊東信雄、東北大学工学部教授　佐藤巧、宮城学院大学助教授　工藤雅樹、東北大学文学部助教授　須藤隆、多賀城跡調査研究所長兼東北歴史資料館副館長　佐藤宏一、国立歴史民俗博物館助教授　阿部義平、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館、奈良国立文化財研究所

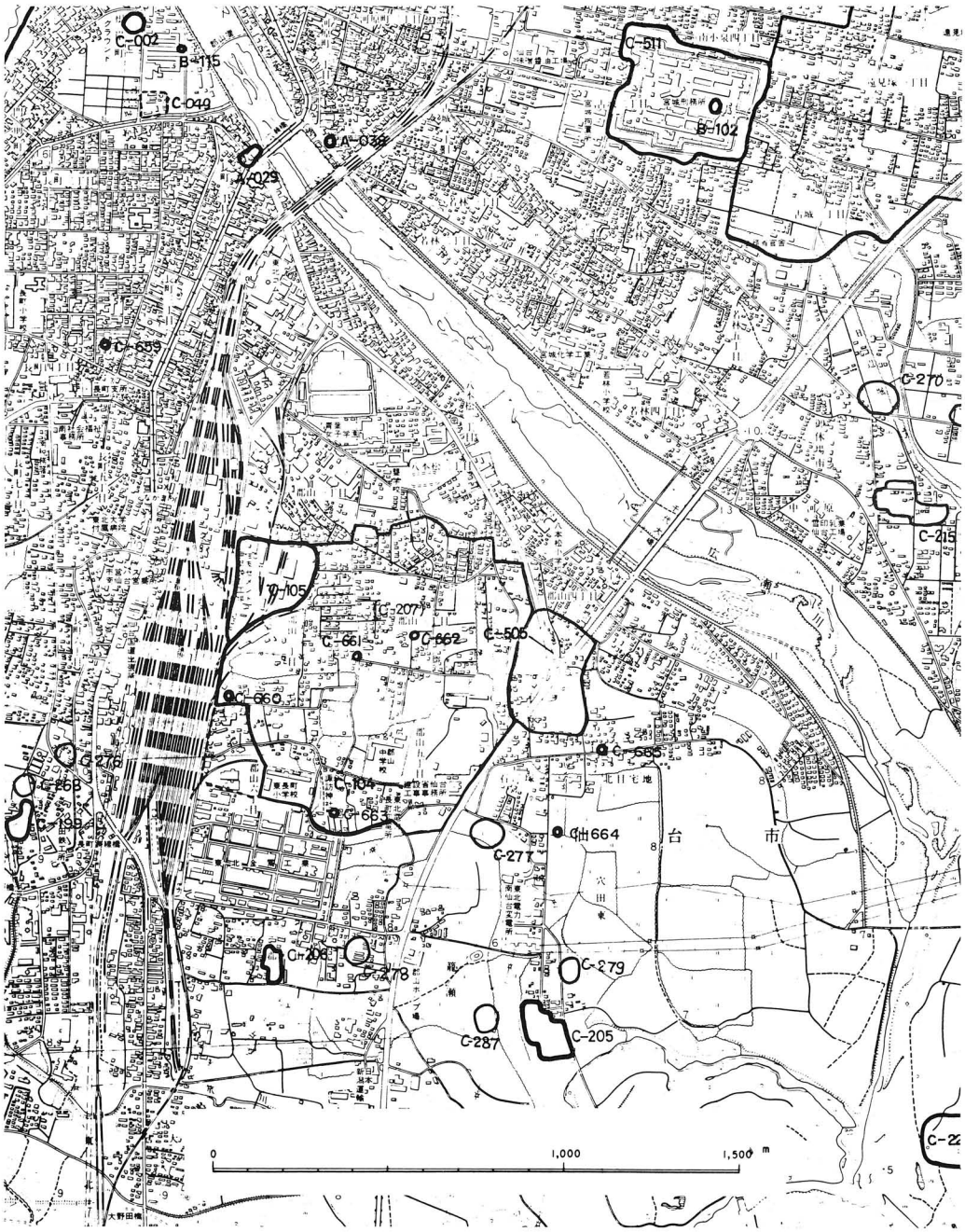
発掘調査及び遺物整理にあたり次の方々の協力を得た。

地権者　　庄子善重

仙台市農業協同組合、大木建設株式会社仙台支店

調査参加者

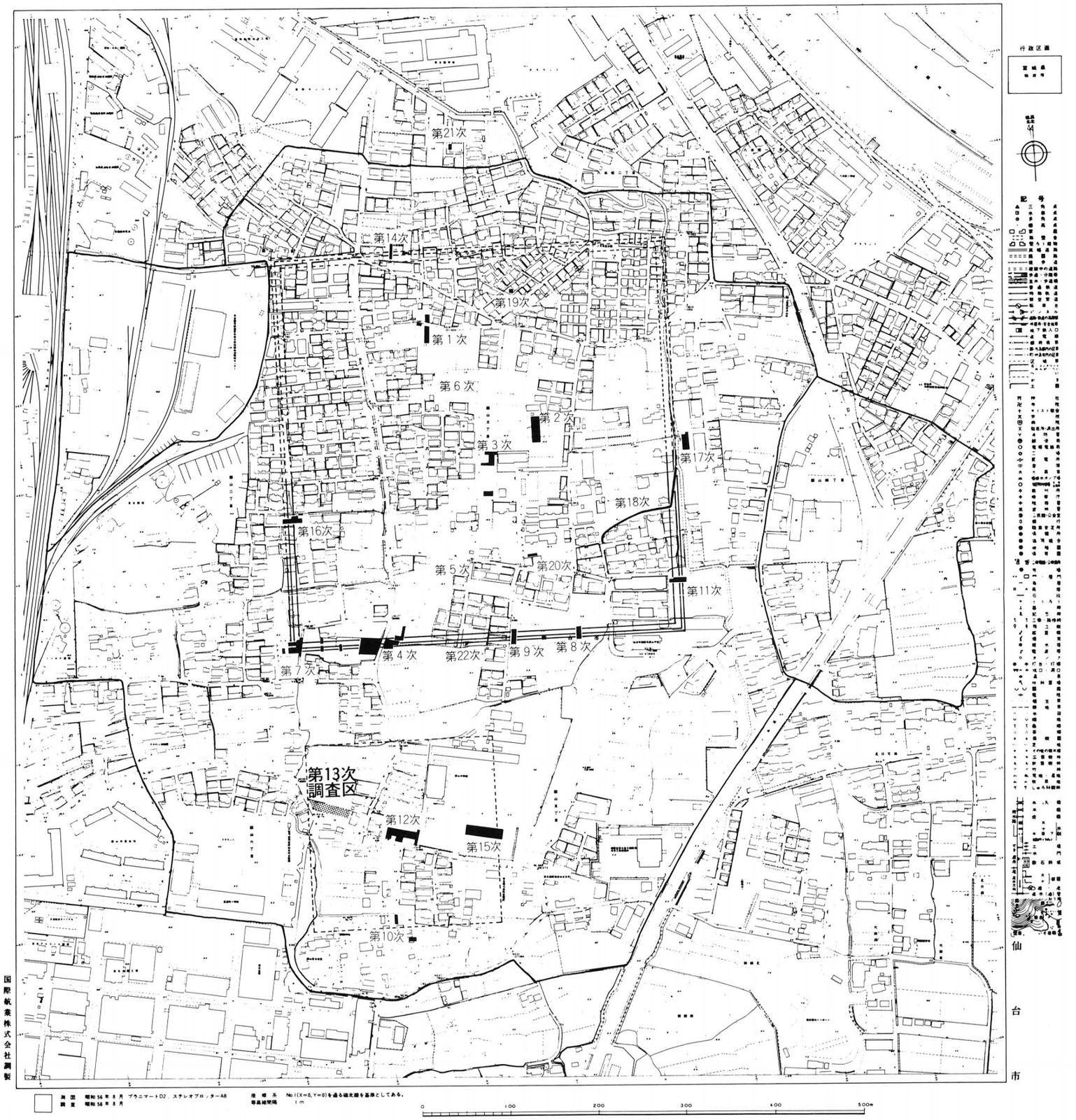
斎藤誠司、赤井沢まり子、谷津妙子（以上整理も含む）、赤井沢進、今野富美子、小島美和子、小林てる、赤井沢さだ子、佐藤光子、赤井沢きすい、板橋やす、工藤ゑなの、赤井沢千代子、佐藤奈美江、宮城多恵、末永澄子、四竈広幸、菊地宜之、佐々田弥生、池田俊也



C－104	郡山遺跡	C－277	矢来遺跡	C－660	長町駅裏古碑
C－105	西台畑遺跡	C－278	籠ノ瀬遺跡	C－661	八幡社古碑群
C－205	欠ノ上遺跡	C－279	欠ノ上Ⅲ遺跡	C－662	郡山三丁目古碑群
C－206	的場遺跡	C－287	欠ノ上Ⅰ遺跡	C－663	諏訪社古碑群
C－207	郡山三丁目遺跡	C－505	北目城跡	C－664	穴田東古碑群
C－206	長町六丁目遺跡	C－659	蛸薬師古碑群	C－665	宅地古碑群

第1図　遺跡位置図

郡山遺跡現況平面図



第２図　郡山遺跡現況平面図

Ⅱ　調査に至る経過

郡山遺跡（仙台市文化財登録番号Ｃ－104)は諏訪神社北方の畑を中心に瓦が散布する地区とさらにその北方に土師器・須恵器が散布する郡山三丁目遺跡とが連繋する形で古くから知られていた。

昭和54年、郡山三丁目205－１、206－１において開発行為が計画され、記録保存の事前調査が仙台市教育委員会により行われ、多くの掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壙などの遺構が発見され、さらに多量の土師器、須恵器、円面硯などの遺物が出土し、７世紀末から８世紀初頭の官衙跡との見方が強まった。（註１）

これらの結果から、三町四方程の真北線を基準にした方形区割線が推定され、また「郡山」という地名が残っていることなどから郡衙跡と考えられるに至った。この地区は近年宅地化が急速に進み、このまま放置すれば遺跡が破壊されてしまう恐れもあることから、文化庁、宮城県教育委員会との協議のうえ、遺跡の範囲と性格を明らかにするため昭和55年度から５ケ年計画で発掘調査を進めている。

昭和55年度の第１年次調査では、推定方三町外郭が西へ一町広がり、外郭線は西、南辺でその位置と構造を検出した。外郭は直径30cm程の丸材木を密に立て並べた柵木列と、その外側に30尺離れて平行する幅３～５ｍの大溝による二重の構造である。さらに推定方四町の中央部で３時期に及ぶ建て替えのある官衙風掘立柱建物群を検出している。（註２）

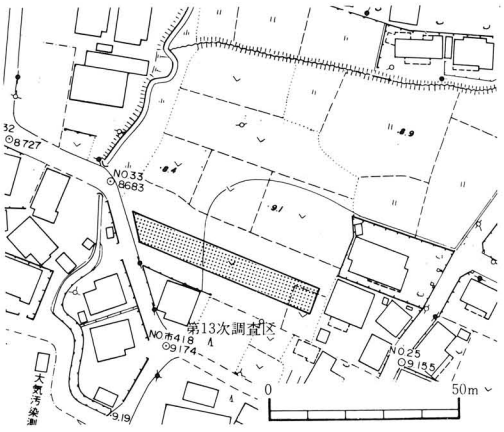
昭和56年度の第２年次調査では、推定方四町南辺大溝から200～220cmの南方で、東西長32m以上にも及ぶ掘り込み基壇の基礎地業をもつ建物跡を検出、また「鴟尾」(しび）といわれる特異な瓦片を発見したことから推定方四町の官衙に付属する「寺院」跡との見方が強まっている。（註３）　これらの状況の中、郡山二丁目11－17、庄子善重氏より郡山五丁目236 において宅地造成のため、昭和56年５月発掘届が提出されたので、地権者、庄子善重氏との協議により、記録保存の事前調査が、仙台市教育委員会により行われ、５棟の掘立柱建物跡、何らかの施設を区画したと考えられる材木列２条、土壙などとともに土師器、須恵器、鉄製品などの遺物を出土している。

Ⅲ　第13次発掘調査

1．調査経過

第13次調査区は、昭和54年度の発掘調査で検出された推定方四町外郭南西コーナー隅櫓建物跡より約160m真南に位置し、また推定方四町の官衙に付属して造営されたと考えられる推定方二町の寺院跡の西辺部にあたる地区である。

調査区西側に即設道路が通り、この道路東側へほぼ東西に幅７ｍ、長さ54mのトレンチを設定した。



第３図　第13次調査区設定図

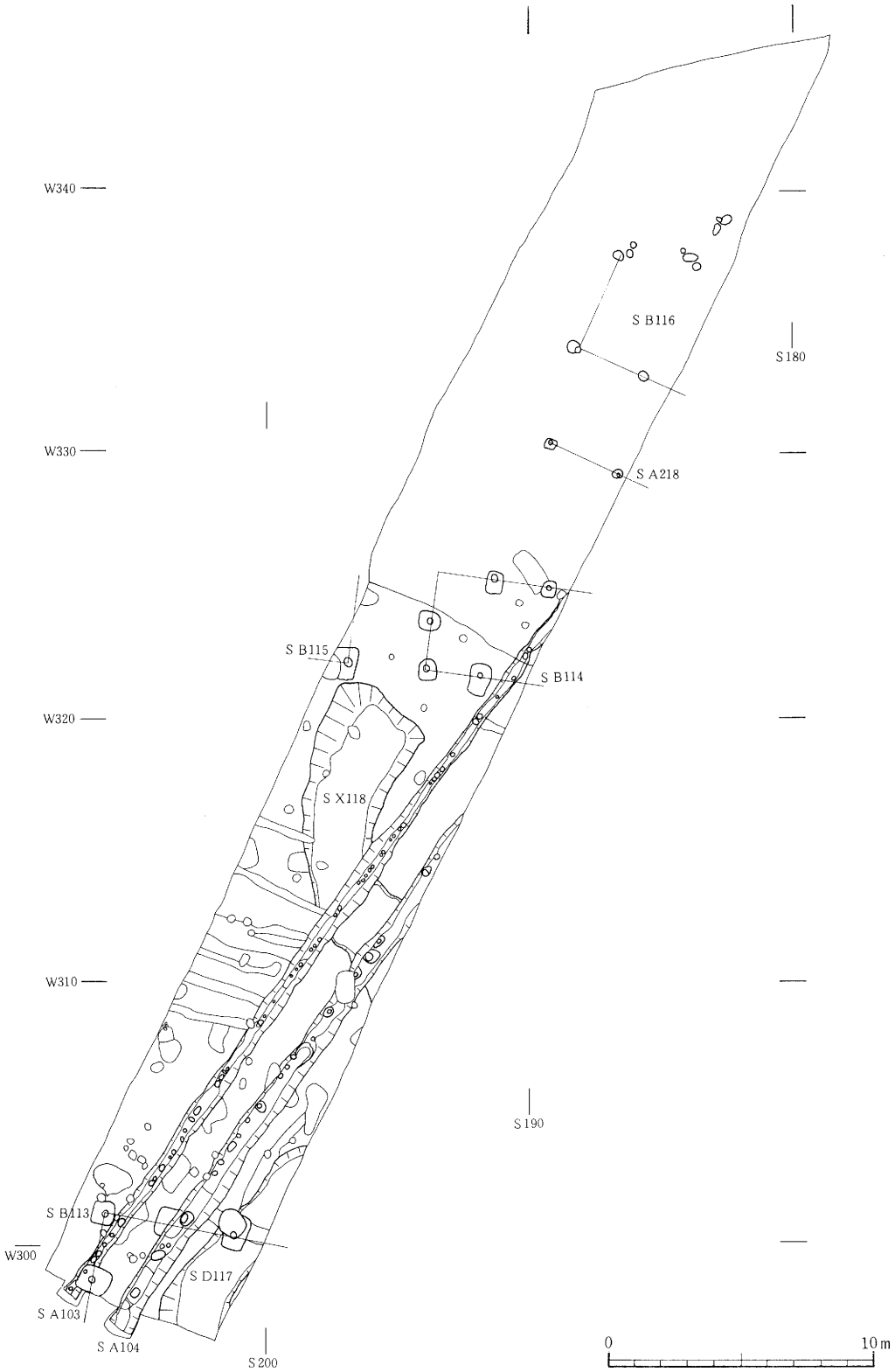
この調査区は、現在まで畑地で、耕作による天地返し等により攪乱が著しい。表土攪乱土を重機により排土し、ほぼ中央より東側は深さ40cm程で暗褐色シルト地山面、西側は80cm程で褐色砂質シルト地山面まで掘下げ遺構の検出を行った。

2．発見遺構

発見された遺構は、材木列２列、掘立柱建物跡４棟、柱列１列、溝跡８条、土壙４基、ピット49である。

ＳＡ103材木列　調査区内で33m分を検出し、方向はＥ－28°－Ｓである。掘り方は上幅32～96cm、下幅20～30cm、深さ30～45cm程の布掘りである。断面形は不整Ｕ字形で、南壁では直立ぎみで、北壁ではやや緩やかに立ち上がる。検出面から10cm程掘り下げたところで30～200cm程の不規則な間隔で、直径10cm前後の材木痕跡を検出した。また幅20～30cm程の平坦な布掘り底面で、さらに方形の掘り方を検出した。掘り方は一辺20cm前後、材木痕跡は直径10cm前後である。布掘り掘り方埋土は、３層に分けられ、１層は黒褐色シルトがブロック状に混入する褐色砂質シルト、２層は黒褐色粘土質シルト、３層は褐色砂質シルトである。断面観察によれば、南壁寄りで幅10cm程の材木痕跡は２層で認められたが、布掘り掘り方上端では検出されなかった。ＳＢ113掘立柱建物跡に切られ、ＳＸ118を切っている。

ＳＡ104材木列　調査区内で23m分を検出した。掘り方は上幅90～100cm、下幅40～60cm、深さ50～60cmの布掘りである。断面形は不整Ｕ字形である。壁は、南壁では直立ぎみで、北壁ではゆるい段をつけて立ち上がる。幅40～60cm程の布掘り底面で、材木痕跡を伴う方形の掘り方を検出した。掘り方は一辺50～60cmで、材木痕跡は15～20cmである。材木痕跡の間隔は40～110cmで、一定の規則性は認められない。布掘り掘り方埋土は、３層に分けられ、１層は暗褐色砂



第４図　13次調査区平面図

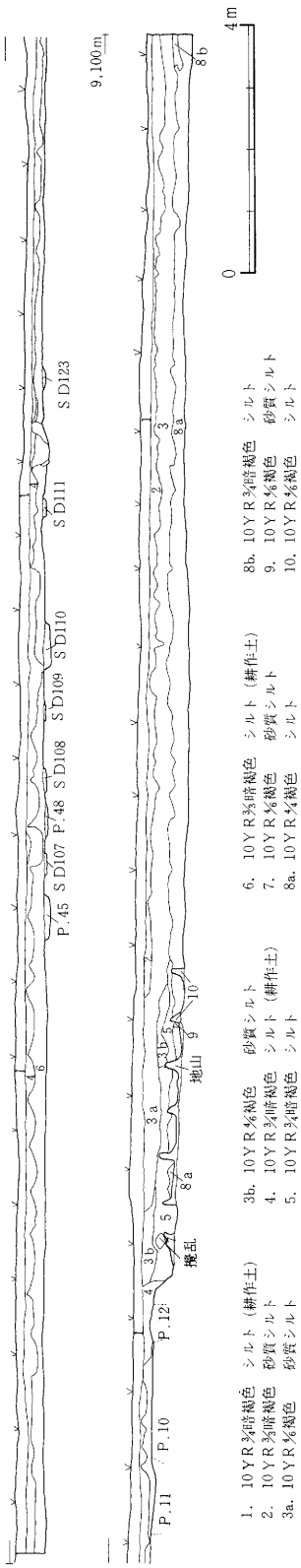
質シルト、2層は酸化鉄をブロック状に含む褐色砂質シルト、3層はにぶい黄褐色砂質シルトである。また方形の掘り方埋土は、にぶい黄橙色砂質シルト、材木痕跡埋土は黒褐色シルト質粘土である。ＳＡ104材木列中心線からＳＡ103材木列中心線まで200cm程、方向は同方向のＥ－28°－Ｓである。ＳＡ103、ＳＡ104材木列は、ＳＢ113掘立柱建物跡との重複関係から同時期の遺構ではなく、ＳＡ104材木列→ＳＢ113掘立柱建物跡→ＳＡ103材木列と三時期の変遷が認められた。ＳＢ113掘立柱建物跡、ＳＸ118を切り、ＳＫ122土壙に切られている。

ＳＢ113掘立柱建物跡　調査区東隅より検出され、東西1間以上（柱間寸法250cm）、南北3間以上（柱間寸法南より250＋250cm）で、方向は南北柱列方向でＮ－3°－Ｅである。掘り方は、不整方形で、一辺80～130cm、深さ80cm程である。西1南3掘り方には100cm程の不整円形の抜き取り方を伴う。柱穴埋土は暗褐色砂質シルトである。遺物は南1東1柱穴掘り方から須恵器甕片が2点出土している。ＳＡ103木材列を切り、ＳＡ104材木列に切られている。

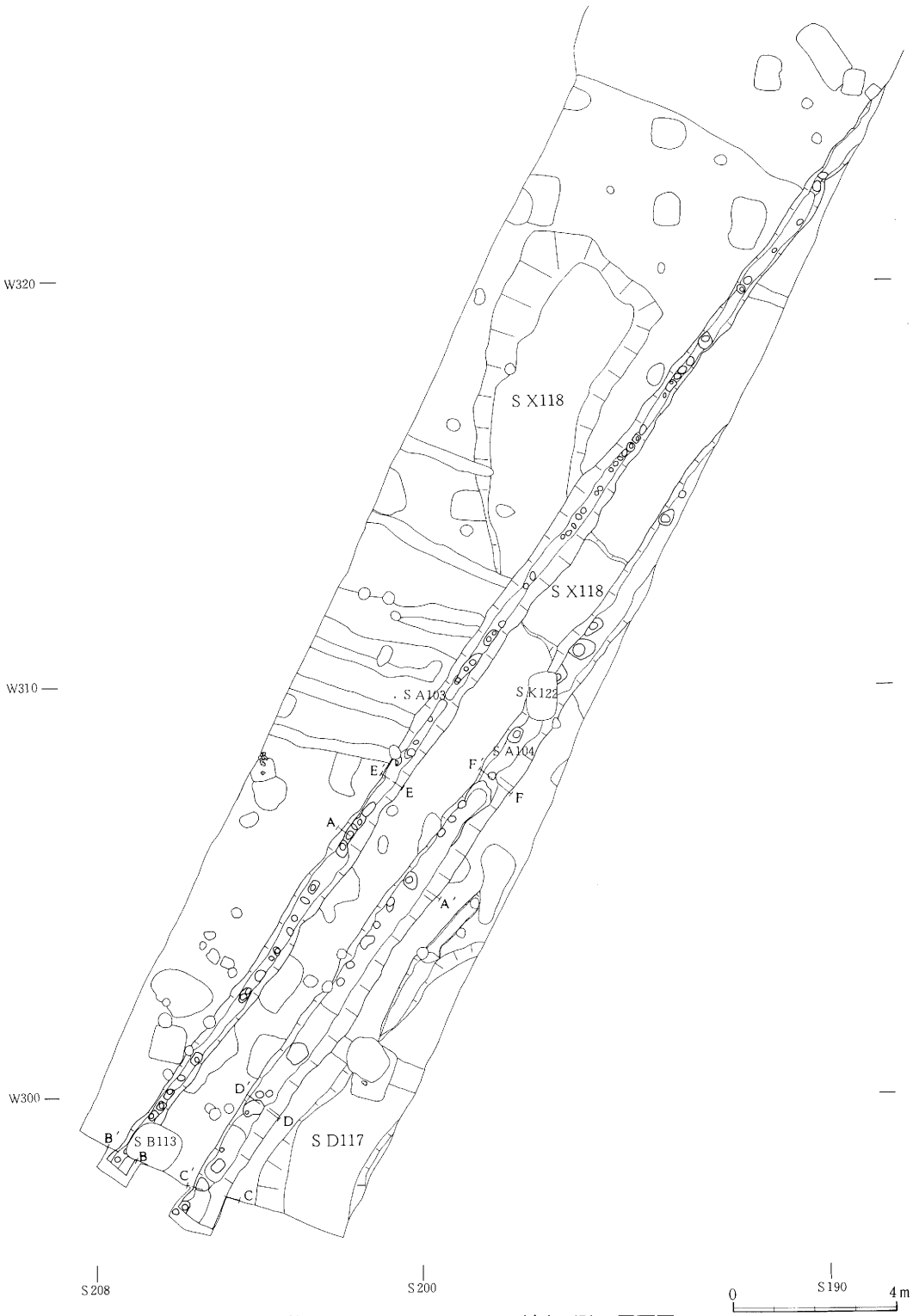
ＳＢ114掘立柱建物跡　調査区ほぼ中央で検出された南北棟建物で、桁行2間以上（柱間寸法210cm）、梁行2間（柱間寸法東より180cm）で、梁柱列は真北方向である。掘り方は一辺60～120cmの不整方形で、深さ40cm前後、柱痕跡は直径20cm前後である。南1西1掘り方は攪乱が深く検出されなかった。柱穴埋土は黒褐色砂質シルト及び黄褐色砂質シルトである。ＳＫ119土壙を切っている。

ＳＢ115掘立柱建物跡　調査区南壁にかかり、方向、桁行、梁行とも不明で、掘り方1つのみ検出された。掘り方は、一辺80×120cm程の不整方形で、柱痕跡は直径30cmである。掘り方埋土は黒褐色砂質シルトである。ピットNo.11に切られている。

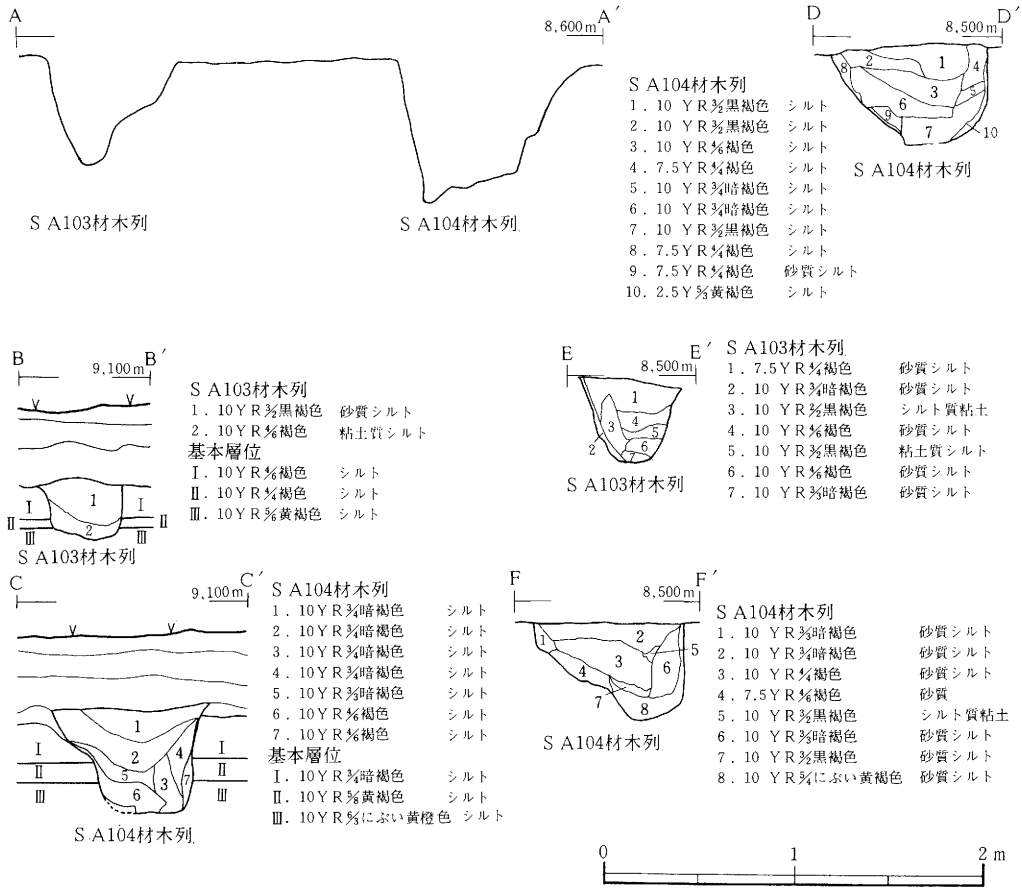
ＳＢ116掘立柱建物跡　調査区西側より検出され東西（柱間寸法370cm）、南北（柱間寸法270cm）とも2間以上と考えられ方向はＮ－19°－Ｅである。掘り方は一辺30～40cmのほぼ不整



第5図　13次調査区
南壁セクション図



第６図　ＳＡ103.ＳＡ104 材木列跡　平面図



第７図　ＳＡ103・104材木列断面図

円形で、柱痕跡は15cm程である。掘り方埋土は灰褐色砂質シルト、及び灰黄褐色砂質シルトである。

ＳＡ218柱列　ＳＢ116掘立柱建物跡の東側で検出され、１間以上（柱間寸法280cm）で、方向はＮ－18°－Ｅである。掘り方は一辺40cm前後の不整方形で、柱痕跡は15～20cmである。掘り方埋土はにぶい黄褐色砂質シルト、及び黄褐色砂質シルトである。

ＳＤ106溝跡　幅30～40cm、深さ10cm程である。断面形はゆるやかなＵ字形を呈する。ＳＤ117溝跡、ＳＫ120土壙に切られる。

ＳＤ107溝跡　幅30～80cm、深さ10cm前後の浅い溝で、底面は平坦である。堆積土は暗褐色砂質シルトで、堆積土中より弥生土器の口縁部片が１点出土している。溝跡は調査区外南に伸びまたＳＡ103材木列に切られる。

ＳＤ108溝跡　幅40cm程、深さ８cm前後の浅い溝である。堆積土は褐色砂質シルトである。堆積土中より須恵器片１点を出土している。溝跡は調査区外南方に伸び、ＳＡ103材木列に切

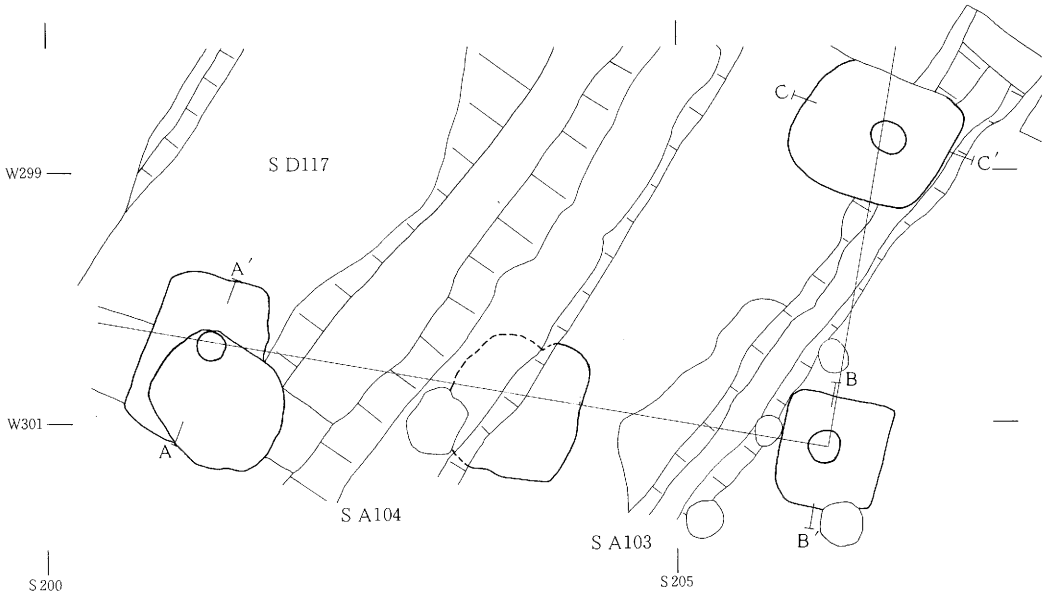
られる。

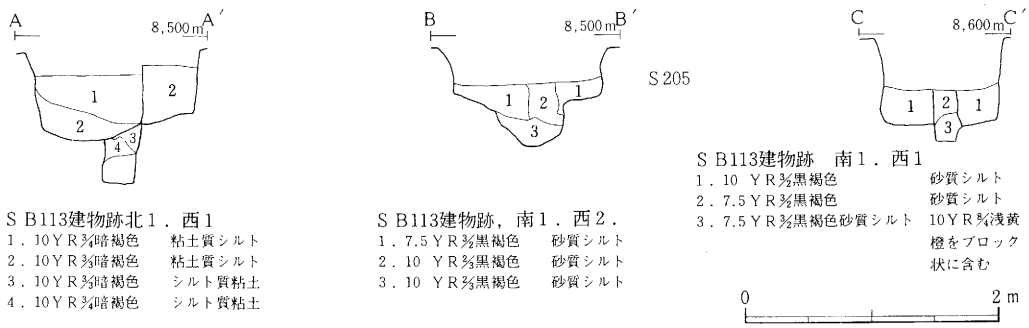
ＳＤ109溝跡　幅20～35cm、深さ５cm前後の浅い溝で、底面は平坦である。堆積土は褐色砂質シルトである。溝跡は調査区外南方に伸びる。

ＳＤ110溝跡　幅90～120cm、深さ10cm前後で、壁は直立し、底面は平坦である。その底面ほぼ中央より幅20cm、深さ10cm程の落ちこみが認められる。堆積土は２層に分けられ、１層は黒褐色砂質シルト、２層は褐色砂質シルトである。堆積土中より須恵器片が１点出土している。溝跡は調査区外南方に伸び、またＳＡ103材木列に切られる。

ＳＤ111溝跡　幅30cm程、深さ10cm程で底面は平坦である。堆積土は暗褐色砂質シルトである。溝跡は調査区外南方に伸び、ＳＡ103材木列に切られ、ＳＸ118を切っている。

ＳＤ117溝跡　幅210cm程、深さ40cm程である。断面形は扁平逆台形を呈している。堆積土は３層に分けられ、１層は褐色シルト、２層は黒褐色シルト、３層は暗褐色粘土質シルトである。



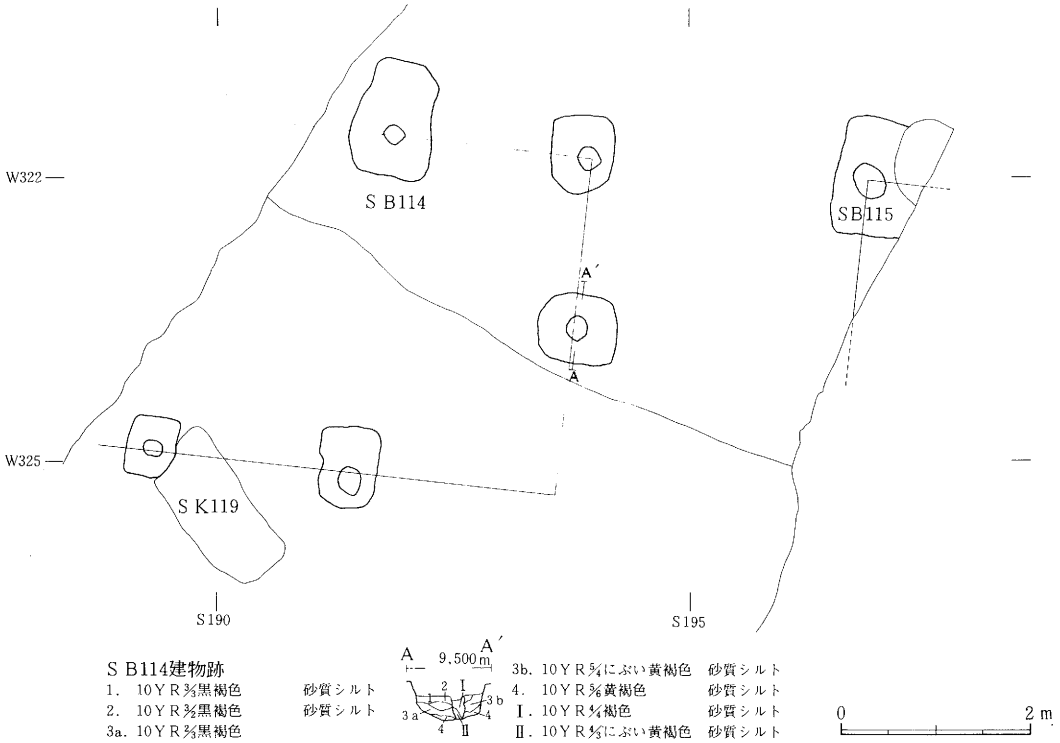


ＳＢ113建物跡北１．西１
1．10ＹＲ3/4暗褐色　粘土質シルト
2．10ＹＲ3/3暗褐色　粘土質シルト
3．10ＹＲ3/3暗褐色　シルト質粘土
4．10ＹＲ3/4暗褐色　シルト質粘土

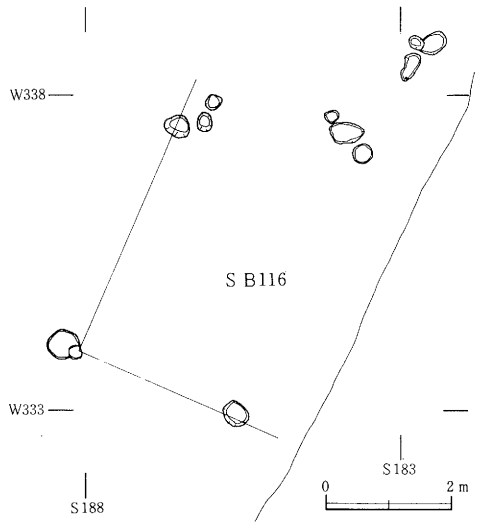
ＳＢ113建物跡，南１．西２．
1．7.5ＹＲ3/2黒褐色　砂質シルト
2．10ＹＲ3/2黒褐色　砂質シルト
3．10ＹＲ3/2黒褐色　砂質シルト

ＳＢ113建物跡　南１．西１
1．10ＹＲ3/2黒褐色　砂質シルト
2．7.5ＹＲ3/2黒褐色　砂質シルト
3．7.5ＹＲ3/2黒褐色砂質シルト　10ＹＲ6/4浅黄橙をブロック状に含む

第８図　ＳＢ113掘立柱建物跡・柱穴セクション図



第９図　ＳＢ114掘立柱建物跡平面図



第10図　ＳＢ116建物跡平面図

２層中から刀子を出土している。溝跡は調査区外北方に伸び、ＳＢ113掘立柱建物跡に切られ、ＳＤ106溝跡を切っている。

ＳＤ123溝跡　幅30cm前後、深さ10cm程で、底面は平坦である。堆積土は褐色砂質シルトである溝跡は調査区外南方に伸び、ＳＸ118を切っている。

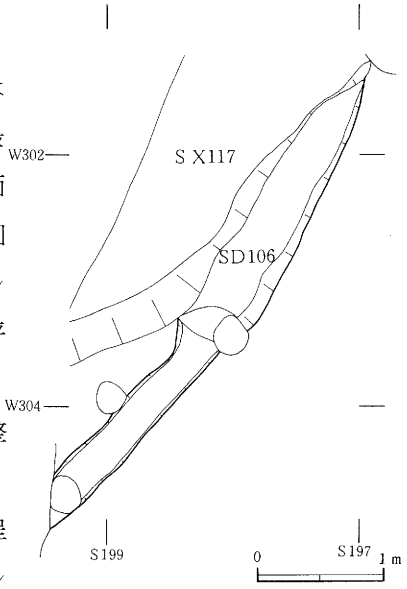
ＳＤ219溝跡　幅30～40cm、深さ10cm程である。断面形は緩やかなＵ字形を呈している。堆積土は黒褐色シルトである。溝跡は調査区外北方に伸びＳＡ103材木列に切られる。

ＳＫ119土壙　調査区中央やや北寄りで検出され、平面形は隅丸長方形で、長軸1.6m、短軸0.7m程、深さ20cm前後である。断面形は緩やかな立ち上がりを呈し、東壁は直立する。

堆積土は、３層に分けられ、１層は暗褐色砂質シルト、３層は褐色砂質シルト、３層はにぶ

い黄褐色砂質シルトである。ＳＢ114掘立柱建物跡に切られている。

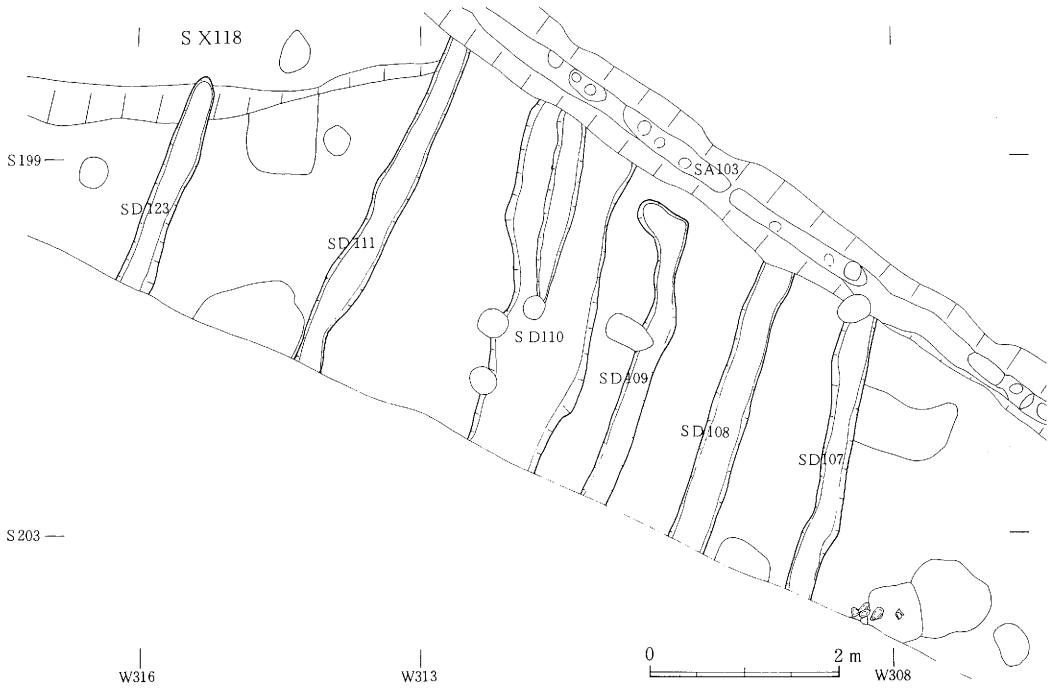
ＳＫ120土壙　調査区北壁東寄りで検出され、平面形は不整方形を呈し、長軸2.0m、短軸0.4m程、深さ28cm、最深部で45cm程を計る。壁はほぼ直立して立ち上がり、底面は平坦であるがその底面に直径15cm、深さ20cmの円形の凹みをもつ。堆積土は２層に分けられ、１層は暗褐色砂質シルト、２層は黒褐色砂質シルトである。遺物は土師器、平瓦の細片が２点出土している。



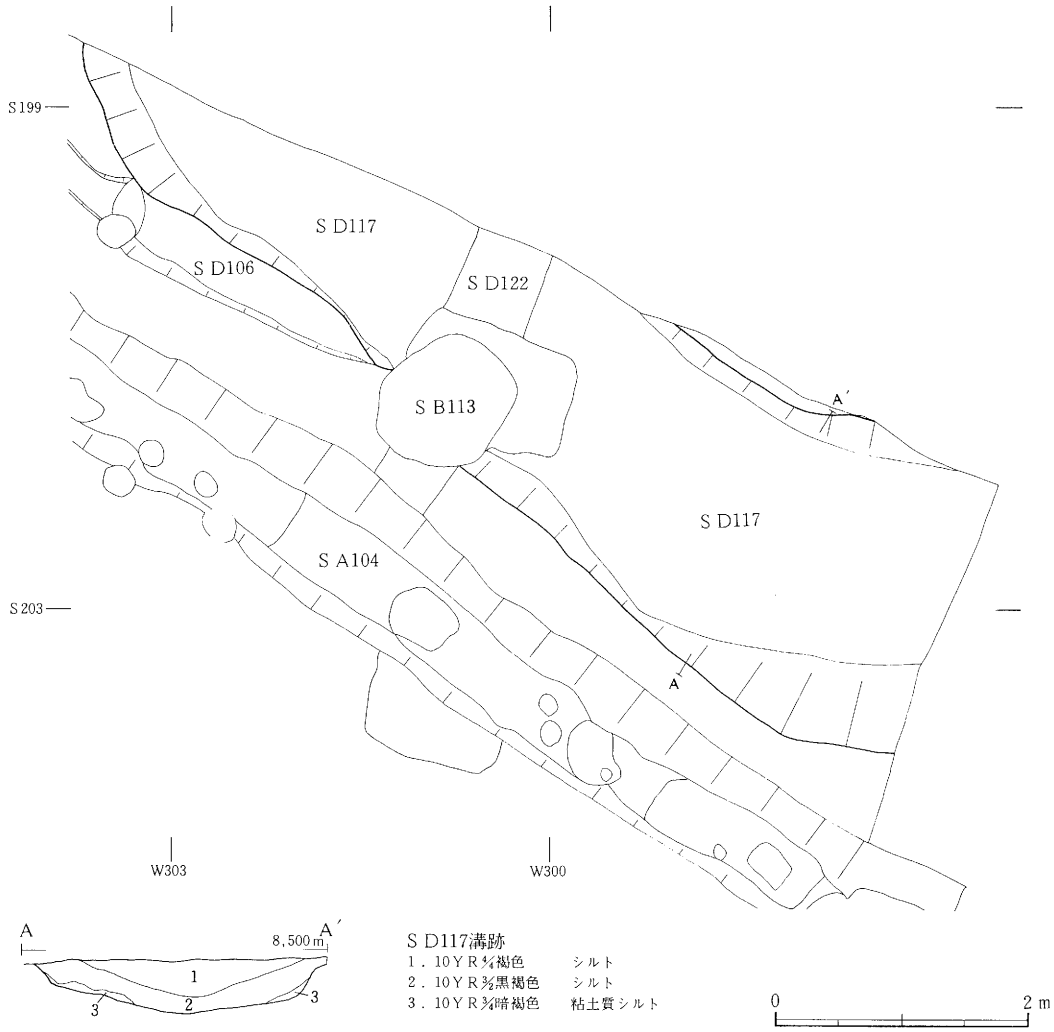
第11図　ＳＤ106溝跡平面図

ＳＫ121土壙　調査区東寄りで検出され、平面形は不整楕円形で、長軸1.5m、短軸1.1m程、深さ20cm程である。断面形は扁平逆台形を呈し、壁は緩やかな立ち上がりを呈している。堆積土は３層に分けられ、１層は黒褐色砂質シルト、２層は褐色砂質シルト、３層は暗褐色砂質シルトである。

ＳＫ122土壙　調査区中央北壁寄りで検出され、平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.2m、短軸0.7m程、深さ35cm程である。断面形はＵ字形を呈し、壁は直立ぎみに立ち上がる。堆積土は



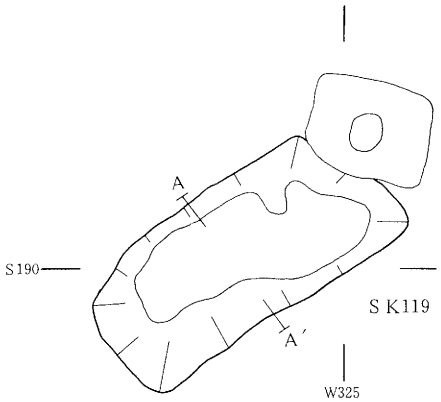
第12図　ＳＤ107～111・123溝跡平面図

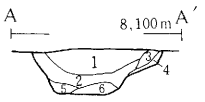


第13図　ＳＤ117溝跡平面図・セクション図

２層に分けられ、１層は黒褐色シルト、２層は暗褐色シルトである。堆積土１層より土師器内面黒色処理された坏、須恵器甕、瓦などの細片を出土している。ＳＡ104材木列を切っている。

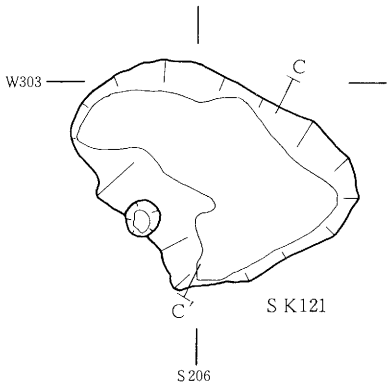
ＳＸ118調査区ほぼ中央で検出された溝跡は、弧状をしており調査区外北に延びる溝状遺構である。幅2.5～3.5m、深さは、西で40cm、北で20cm程である。断面形は扁平逆台形で、南壁で緩やかに立ち上がり、北壁で、やや傾斜している。堆積は３層に分けられ、１層は暗褐色砂質シルト、２層は褐色砂質シルト、３層は黒褐色シルトである。１層で幅40×60cm、厚さ８cm程の広がりで炭化物を出土、また弥生土器、土師器坏、甕等の細片を少量出土している。３層で土師器甕片を出土している。ＳＡ103、104材木列、ＳＤ123溝跡に切られている。

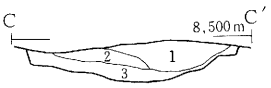




S K119土壙

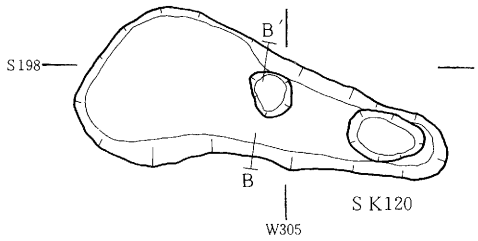
1．10Y R 3/4暗褐色	砂質シルト
2．10Y R 4/4褐色	砂質シルト
3．10Y R 5/6にぶい黄橙色	砂質シルト
4．10Y R 4/4褐色	砂質シルト
5．10Y R 3/2黒褐色	粘土
6．10Y R 5/3にぶい黄褐色	砂質シルト

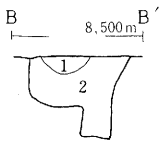




S K121土壙

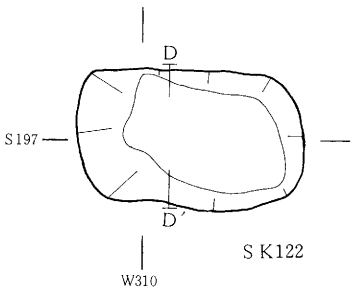
1．10Y R 3/2黒褐色	砂質シルト
2．10Y R 4/4褐色	砂質シルト
3．10Y R 3/3暗褐色	砂質シルト

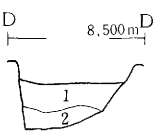




S K120土壙

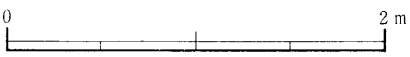
1．10Y R 3/3暗褐色	砂質シルト
2．10Y R 3/2黒褐色	砂質シルト



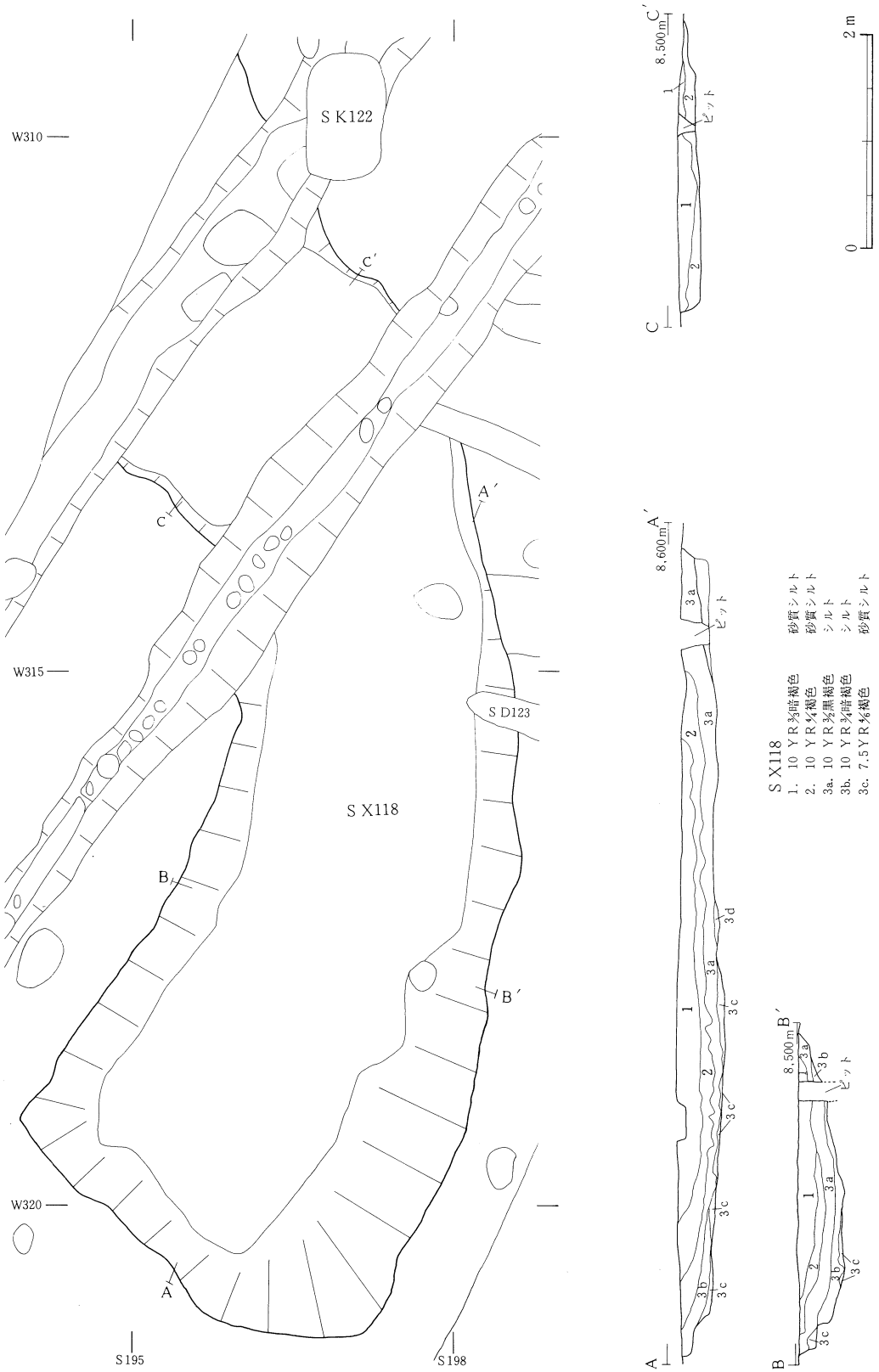


S K122土壙

1．10Y R 3/2黒褐色シルト
2．10Y R 3/3暗褐色シルト



第14図　S K119～122土壙平面図・セクション図



第15図　S X118 平面図・セクション図

3．出土遺物

第13次調査での出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦、鴟尾、鉄製品であるが、復元可能なものは極少量である。耕作による天地がえし等の攪乱が深く、ほとんどが耕作土中からの出土である。

以下遺物の器種、器形ごとに略述する。

弥生土器

弥生土器は口縁部、頚部、胴部等の細片７点が出土し、耕作土中、ＳＤ107溝跡、ＳＸ118等から少量出土するが、器形が判明するものはほとんど認められない。Ｂ－２（第16図１）は耕作土中から出土、口頚部破片のみで、口縁部に押圧による刻目を加えた小波状口縁で、口縁部外面に三条の横位沈線その下端に指頭状工具による交互刺突文を施している。Ｂ－２（第16図３）は耕作土から出土、小破片の為器形は不明であるが、外面に刺突文を施している。Ｂ－５（第16図２）はＳＤ107 溝跡堆積土から出土し、外面頚部に三条の横位沈線を巡し、その下端に刺突文を施している。いずれも小破片のため器形は明らかではないが、文様等の特徴などから天王山式土器と考えられる。

土師器

土師器坏・甕等の破片が多く復元可能なものは極少量である。Ｃ－172坏（第16図４）は、耕作土中より出土。非ロクロの丸底である。内外面体部中位に段を有し、体部上半から、わずかに内弯ぎみに立ち上がる。外面体部下半は手持ちヘラケズリ、体部上半はヨコナデである。内面は横方向のヘラミガキで、黒色処理されている。Ｃ－173坏（第16図５）は耕作土中より出土。非ロクロ、外面体部下端に段を有し、体部上半から内弯ぎみに立ち上がる。外面体部上半ヨコナデ、体部下半手持ちヘラケズリ、内面口縁部ヨコナデである。Ｃ－171甕（第16図６）はＳＸ118より出土。体部上半欠損しているが、底部は木葉痕をもつ平底で、外面体部下半は刷毛目、手持ちヘラケズリ、内面体部はヘラナデである。

須恵器

須恵器は坏、甕、高台付坏等であるが、大半が小破片である。Ｅ－98（第16図10）は耕作土中から出土し、口頚部破片である。復元口径は47.8cm程で、頚部外面は、二条の浅い沈線で３段に区画され、櫛描きによる６～８本の不規則な波状文を３段に巡らしている。内面頚部は同心円文のオサエ目がわずかに見られるが、ほとんどナデである。外面は平行叩き目である。Ｅ－97甕は耕作土中から出土し、口頚部破片であるが、外面頚部は、浅い沈線で５段に区画され、３～６本の不規則な沈状文、また棒状工具による斜状沈線を施している。頚部内面はナデである。Ｅ－107甕はＳＡ104材木列埋土から出土。体部破片のため器形は不明であるが、外面体部は平行叩き目文、内面は同心円文、青海波文オサエ目を施している。Ｅ－105（第16図８）

は遺構検出面から出土。外面体部は平行叩き目文、内面は青海波文オサエ目を施している。E—106（第16図７）は耕作土中より出土。外面体部は平行叩き目文、内面は同心円文オサエ目を施している。

瓦

平瓦、丸瓦は細片が多く、ほとんど耕作土中から出土している。わずかにＳＡ104材木列、ＳＫ120、122土壙、ピットNo.44等から出土している。平瓦は凸面が縄目叩き、凹面が布目である。丸瓦は凸面が縄目叩き、多方向のナデ、凹面は布目である。

鴟尾

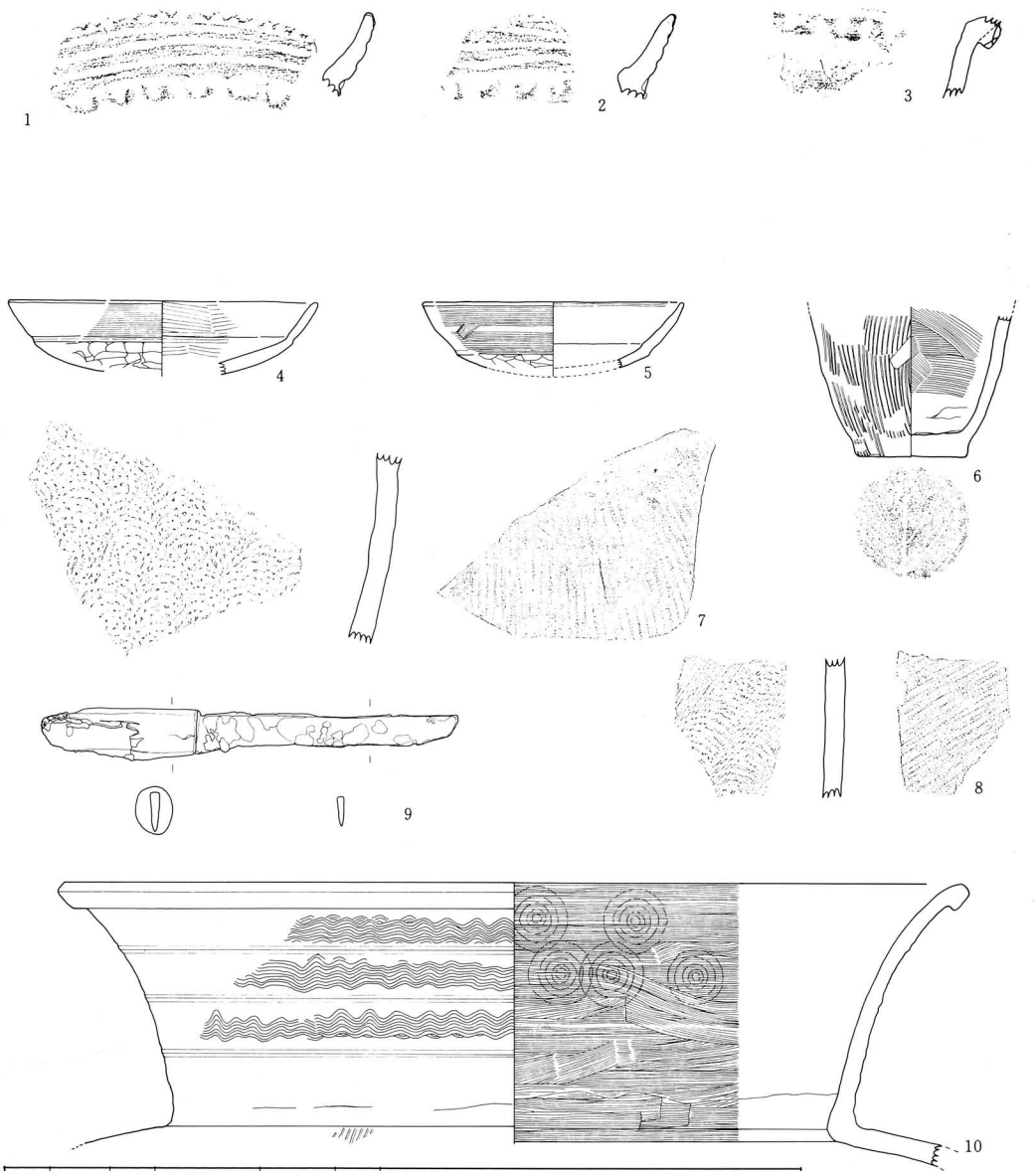
耕作土中より１点出土し、小破片のため器形は不明である。昭和56年度第12次調査区出土の鴟尾と胎土、焼成が類似している。

鉄製品

Ｎ－３刀子（第16図９）はＳＤ117溝跡堆積土２層より出土している。木製の柄を残存する平棟平造り刀子である。柄の一部が腐蝕し、また全体的に錆化が進み、不明瞭であるが、現存長は22.2cmを計る。刀身長は13.9cm、身幅は区の付近で2.0cm、棟幅は刀身部で3.5mmを計る。柄

表　第１～22次調査区土師器坏分類表

分類		器形	調整							実測図番号
			外面			内面		底部	備考	
			口縁部	体部上半	体部下半	口縁部	体部			
Ⅰ	a	口縁部「く」字に内側に屈曲	ヨコナデ	手持ちヘラケズリ		ヨコナデ	ナデ一部ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	内外面朱塗り	C－7
	b	口縁部に沈線							〃	C－10、12
	c	口縁端部がわずかに外反し立ち上がる							〃	C－5
	d	口縁部ゆるい「S」字状								C－168
	e	口縁部「S」字状に外反								
	f	口縁部ゆるやかに直立								
	g	口縁部直線的に直立								C－148
Ⅱ	a	体部中位に段	ヨコナデヘラケズリ	ヨコナデ	手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	黒色処理（内面）	C－8
	b	体部下半に段、内面にも段	ヨコナデ	ヨコナデ		ヨコナデヘラミガキ				C－68、74、86 94
	c	体部下端に段								C－165
	d	丸底風平底、体部中位に稜	ヨコナデ後ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ後ミガキ		ヘラミガキ		手持ちヘラケズリ後ミガキ		C－6
	e	丸底で、体部中位に稜	ヨコナデ	ヨコナデ	手持ちヘラケズリ	ヨコナデヘラミガキ		手持ちヘラケズリ		C－92
Ⅲ		底部から口縁部までゆるやかに弯曲	ヨコナデ	手持ちヘラケズリ		ヨコナデ	ヘラミガキ	手持ちヘラケズリ	黒色処理（内面）	C－110 C－102
Ⅳ		丸底で、体部下半に稜	ヨコナデ	手持ちヘラケズリ		ヘラミガキ			黒色処理（内面）	C－72、73



番号	登録番号	写真	遺構・層位	種類	器種	特徴 外面	特徴 内面
1	B-2	17-3	表採	弥生土器			
2	B-5	17-1	SD107	〃			
3	B-2	17-3	表採	〃			ナデ
4	C-172		表採	土師器	坏	口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラケズリ	ミガキ後黒色処理
5	C-173		表採	〃	〃	口縁部から体部にかけ横ナデ 体部 ヘラケズリ	
6	C-171	17-2	SX118 ℓ3	〃	甕	体部 刷毛目、底部木葉痕	ヘラナデ
7	E-106	17-7	検出面	須恵器	〃	平行叩き目	青海波文
8	E-105	17-6	検出面	〃	〃	平行叩き目	青海波文、柾目痕
9	N-3	18-3	SD117 ℓ2	金属製品	刀子		
10	E-98	17-5	表採	須恵器	甕	口縁部 櫛描き波状文 肩部 平行叩き目	口縁部 青海波文、ヘラナデ 肩部 青海波文

第16図　13次調査区出土遺物実測図

は長さ8.3cm以上、幅は2.7cmである。断面形は楕円形で、厚さはほぼ均一で2.0cmである。X線撮影による観察から、茎幅は区付近で1.7m、茎尻付近で0.8mを計り、茎を柄に差し込み、茎と柄を固定する為、幅0.5cmの責金具を取り付けている。

4．ま と め

郡山遺跡は郡山二～六丁目に及び、国鉄東北本線長町駅の東側に位置し、東西800m、南北900mの広がりを有し、昭和55年度からの範囲確認調査で、推定方四町の官衙域と推定方二町の寺院域とがその中に規則的に配置されていることが明らかになりつつある。方四町官衙域は遺跡の中央北寄りを占め、柵木列と大溝とによって整然と区画され、外郭柵木列は櫓建物を伴っていたことが判明し、郭内にも多くの建物跡の存在が予想される。また、推定方二町寺院域は官衙の南側に位置し、推定域内から多量の瓦が出土していたこと、東西長32m以上の版築基壇や寺院に関連のある木簡が発見されていたことなどから、官衙と同時代に造営された寺院跡と考えられるに至っている。

今回の第13次調査は国庫補助事業として実施している「郡山遺跡範囲確認調査」の第2年次の発掘調査と併行して行われた。調査地区は官衙域南方の推定二町寺院域の西辺部にあたり、版築基壇が発見され、寺院域のほぼ中心と考えられる第12次調査区から北西約90m、推定方四町南西隅櫓建物跡からは南に約170mの地点に位置する。現状は標高9m前後の畑地となっており、調査区の西外側には寺域線を推定する根拠となった掘り割りが南北方向に延びている。

調査区内は西半分が、耕作による天地返しが深く、遺構の遺存状況は良好と言えず、主なる遺構は東半分に集中している。

トレンチにほぼ平行して発見されたＳＡ103・104材木列は方向がＥ－28°－Ｓで、両者同一方向であり、昭和55年度に第2・4次調査で発見された掘立柱建物跡の柱筋方向とほぼ同一である。これらの方向は方四町・方二町と推定される官衙域や寺院域の区画に用いられた真北基準方向と明らかに相違し、郡山遺跡の中での遺構の在り方が、外郭線の区画や建物配置において、真北線を基準にしている時期と真北方向から30°前後偏した線を基準にしている時期の二時期にわたる大きな改変が行なわれたことが考えられていたが（註4）、この調査区内でもそれを裏づけるかのようにＥ－28°－Ｓの材木列とＮ－3°－Ｅの掘立柱建物跡が重複して発見された。

主なる遺構の重複関係は次のとおりである。

ＳＸ１１８（性格不明）
↓
ＳＡ１０３材木列　　ＳＤ１１７溝跡
↓　　↓
ＳＢ１１３建物跡
↓
ＳＡ１０４材木列

ＳＸ118、ＳＤ117溝跡については規模、方向、性格等の詳細は不明であり、言及することはできない。ここで問題となるのは２列の材木列と建物跡との重複関係である。昭和55年度概報「郡山遺跡Ⅰ」の中で、真北基準の遺構と30°基準の遺構との二時的変遷があることについて触れていたが、ここでは30°基準→真北基準→30°基準という三時期の変遷がみられた。また、これらに先行するＳＸ118等の遺構もみられる。この三時期（あるいは四時期）にわたる変遷が、遺跡全体に及ぶものかどうかは今後の調査成果を十分に検討していかなければならないが、30°基準の遺構群が少なくとも単一の時期ではなく、複次にわたるものであることが判明した。

ＳＡ103・104材木列は前述のように若干時期の異なるものとはいえ、方向や材木痕跡の検出状況等、遺構の在り方が非常に似かよっており、遺構の性格、構築の目的など、ほぼ同様のものと考えられる。このように布掘りを行い、材木を伴う古代の遺構については、郡山遺跡の中では推定方向四町官衙の外郭区画施設として柵木列、または昭和56年度第15次調査で発見した杭列跡があり、柵木列は設置された材木が密接し、材木頂部は少なからず地上に露出して、いわゆる「柵」としての機能を持っていたものと考えられ、杭列は材木痕跡の下端が先尖りとなり地山に打ち込んだことがわかるものである。このようなことからみれば、ＳＡ103、104は材木の痕跡が布掘り検出面では検出されず、土層断面の観察によっても明らかに土中に埋設されたものであることがわかり、柵木列とは言い難い。また、材木痕跡が布掘り中央ではなく、南壁際に寄っており、両者とも全て材木が土圧により南壁に寄ったとも考え難いところから何らかの意図のもとに南壁際に埋設されたものと考えられる。材木痕跡の直径、間隔等が不規則でもあり、遺構上部が削平され明らかでないことなどから、性格は不明であるが、現段階では何らかの区画施設の一部と考え、単に材木列と言っておきたい。

ＳＢ113、114建物跡は柱筋方向がほぼ真北方向の掘立柱建物であり、方四町、方二町と推定される官衙、寺院に関連する建物跡と考えられるが、同方向の建物跡や遺構等が他に発見されず、この地区が、推定寺院域の西辺部にあたっていると考えられるが、それを断定するに至らなかった。

出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、瓦、鴟尾、鉄製品である。弥生土器はわずか数点であるが、天王山式と考えられ、弥生時代の遺構の存在も予想されたが、発見されなかった。その他の遺物はいづれも小破片で、器種、形態等が明らかなものは極くわずかであるが、概観すれば、これまでの郡山遺跡の調査で出土した遺物と年代的には同時期のもので、７世紀末から８世紀前半代のものと考えられ、遺構の年代もおおむね、この時期と考えられる。

註

註１　仙台市教育委員会「３、郡山遺跡発掘調査概報」仙台市文化財調査報告書第23集「年報１」1980、３

註２　仙台市教育委員会「郡山遺跡Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第29集1981、３

註３　ニューサイエンス社　考古学ジャーナルNo.198　12月号「郡山遺跡の調査」1981、12

註４　註２と同じ

参　考　文　献

陶邑Ⅰ　大阪府文化財調査報告書第28輯　大阪府教育委員会

〃　Ⅱ　〃　第29輯　財団法人大阪文化財センター

〃　Ⅲ　〃　第30輯　〃

仙台市文化財調査報告書第24集「今泉遺跡」　仙台市教育委員会　1981

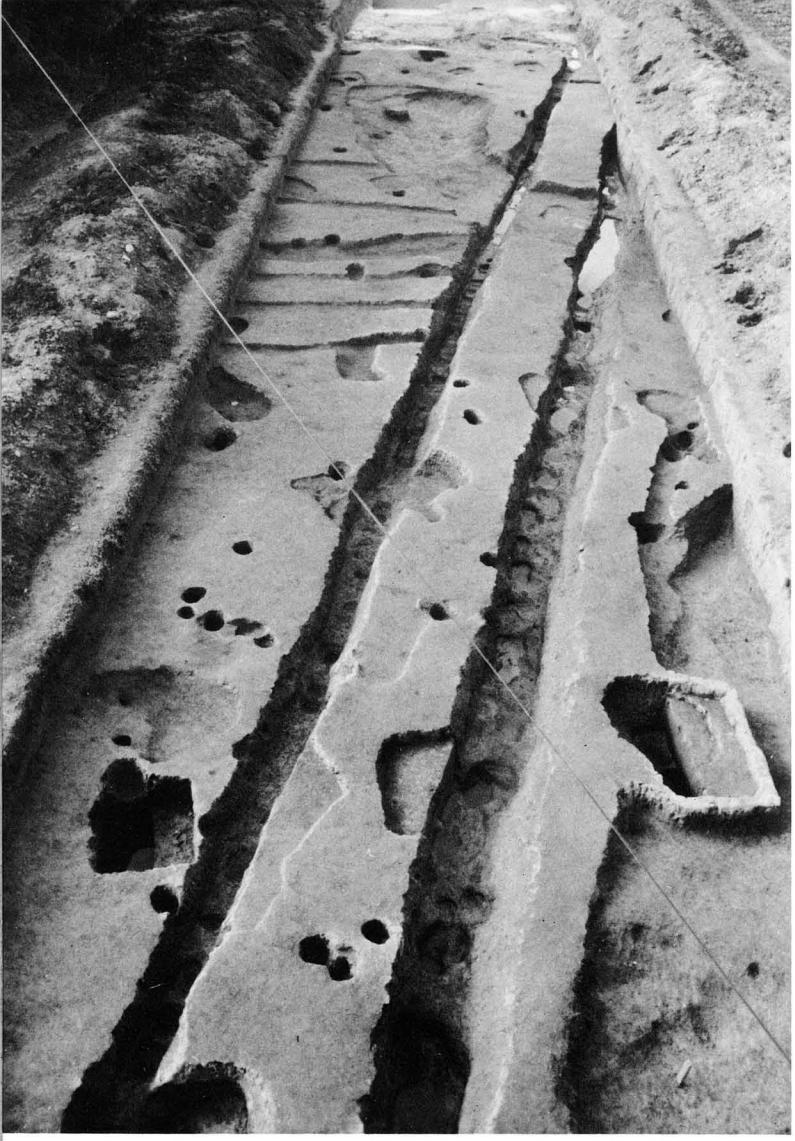
〃　第29集「郡山遺跡Ⅰ」　仙台市教育委員会　1981、３

〃　第38集「郡山遺跡Ⅱ」　〃　1982、３

宮城県文化財調査報告書第77集「清水遺跡」　宮城県教育委員会　1981

写　真　図　版

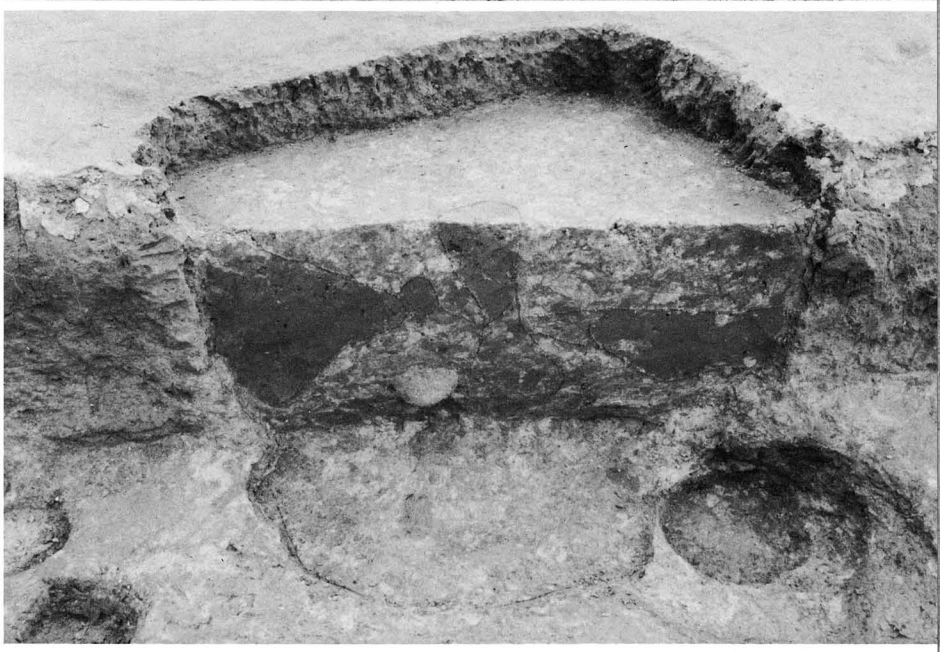
図版1　郡山遺跡航空写真



図版２　調査区全景

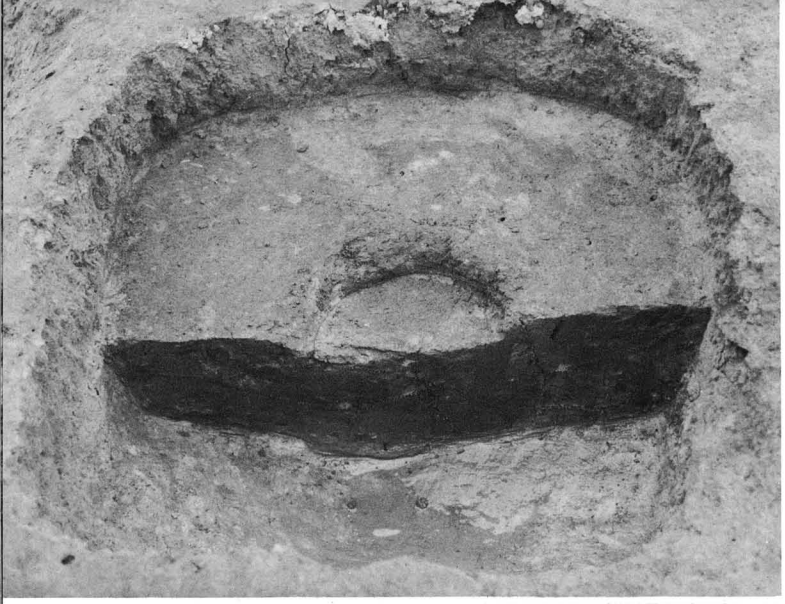
図版３
ＳＢ113
掘立柱建物

図版４
ＳＢ113掘立柱建物跡
西２．南１．掘り方
セクション



図版５
ＳＢ113掘立柱建物跡
西１．南２　掘り方
セクション

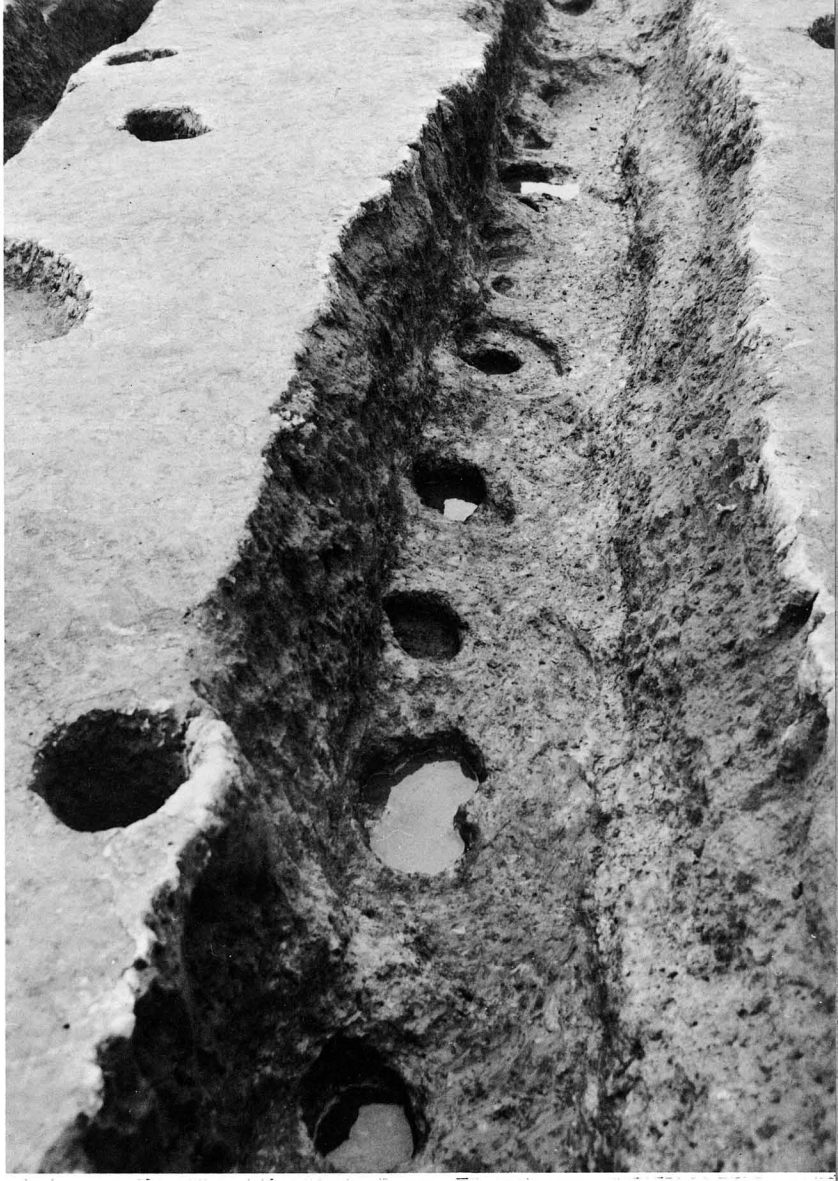
図版６
ＳＢ113掘立柱建物跡
西１．南３　掘り方
セクション



図版７
ＳＢ114掘立柱建物跡
南１．東２　掘り方セクション

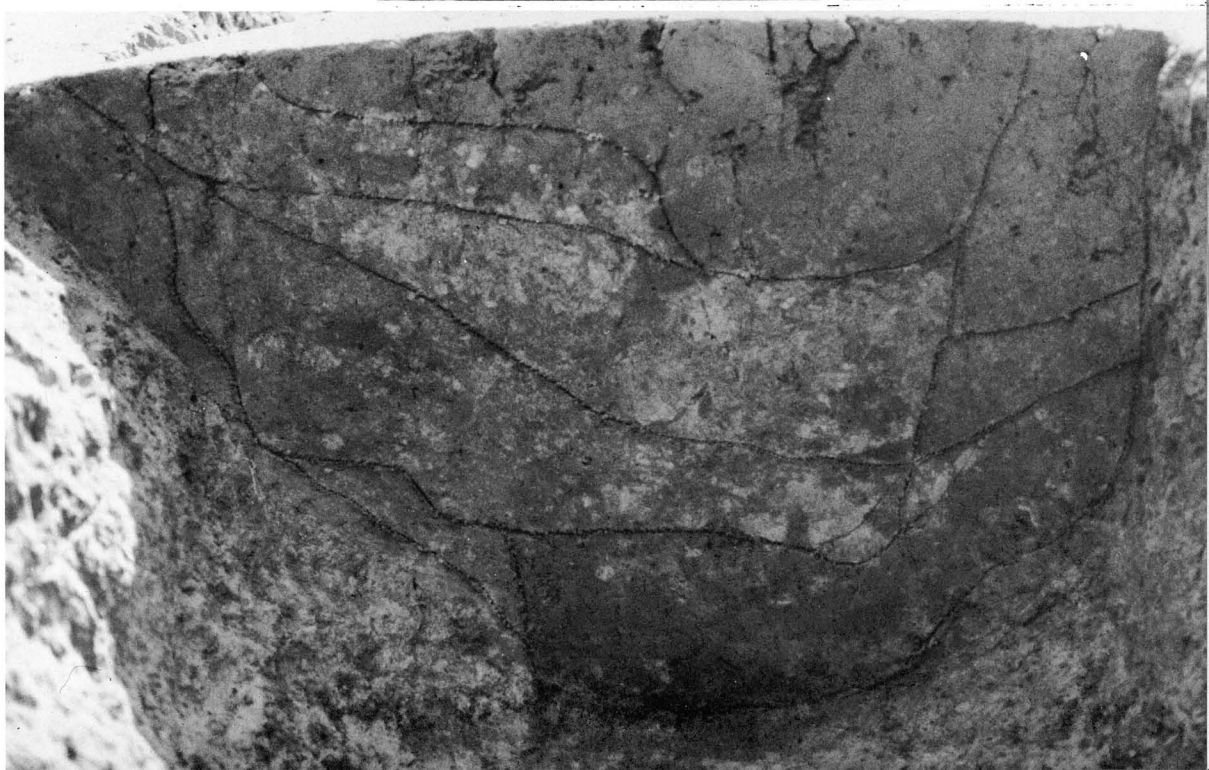
図版８
ＳＡ104材木列セクション

図版９
ＳＡ103材木列
底面検出状況



図版10
ＳＡ104材木列
底面検出状況

図版11
ＳＡ104材木列セクション



図版12
ＳＫ119土壙
セクション

図版13
ＳＫ122土壙
セクション

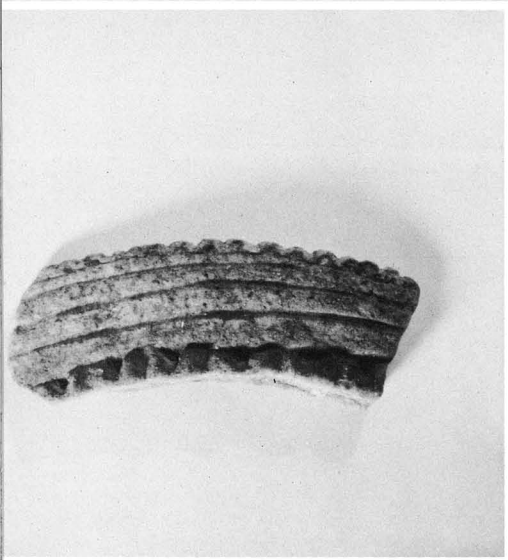
図版14
ＳＫ120土壙　全景

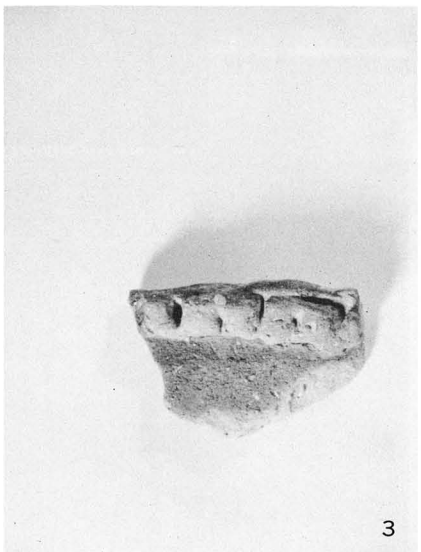
図版15
ＳＸ118遺物出土状況

図版16
ＳＸ118全景

1

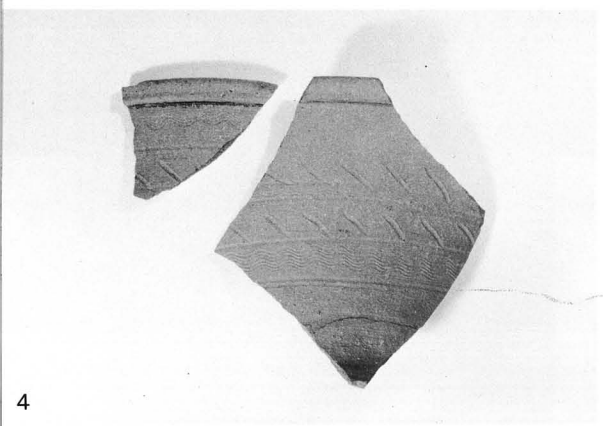
2



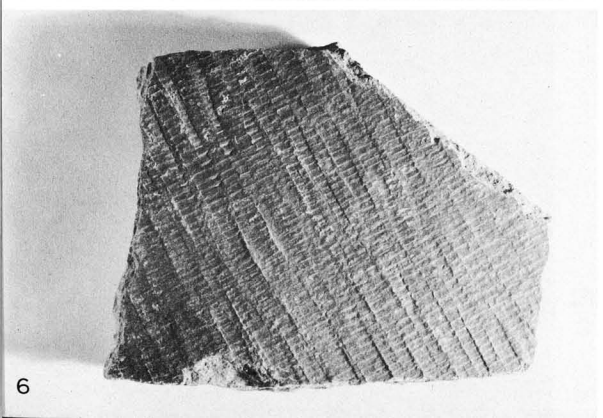

3

図版17　出土遺物

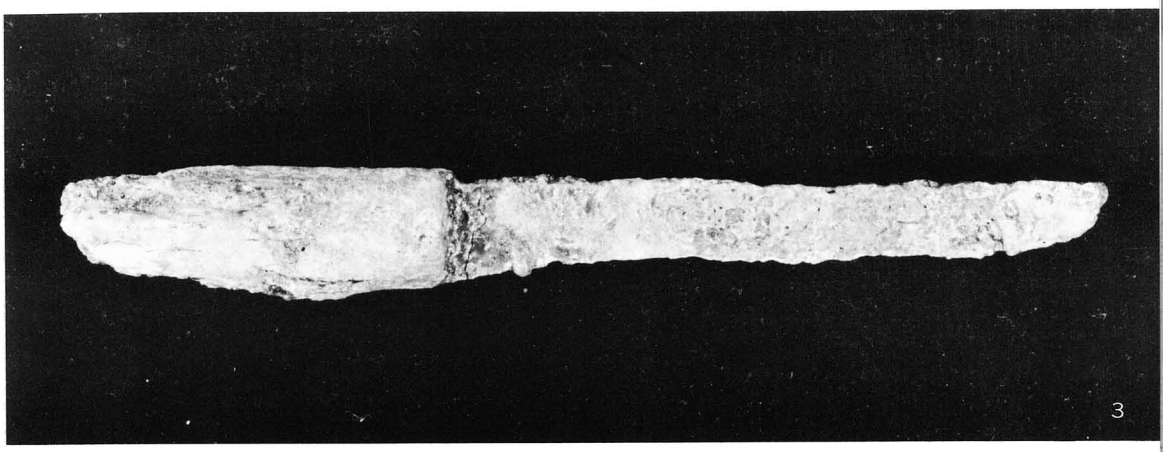
1．弥生土器　B－5
2．土 師 器　C－171
3．弥生土器　B－2
4．須恵器甕　E－107
5．　〃　　E－98
6．　〃　(A)　E－106
7．　〃　(B)　E－106

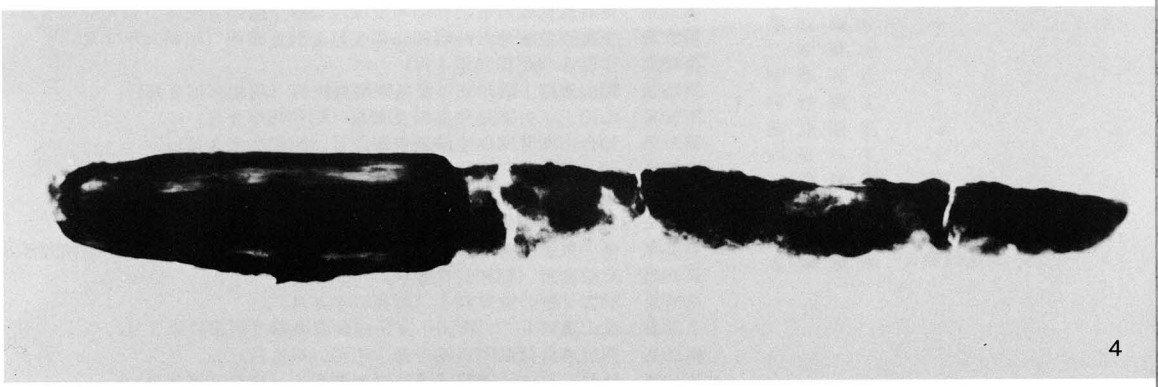

4

5


6

7





X 線 写 真

図版18　出土遺物

1．須恵器甕　E－107
2．〃　E－107
3．刀　子　P－3
4．〃　P－3

職　員　録

社会教育課

課　　長　永野昌一
主　　幹　早坂春一

文化財管理係

係　　長　鈴木昭三郎
主　　査　鈴木高文
　　（10月1日異動）
主　　事　山口　宏
〃　　渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)　早坂春一
教　　諭　佐藤　隆
〃　　渡辺忠彦
〃　　佐藤　裕
〃　　加藤正範
主　　事　田中則和
〃　　結城慎一
〃　　成瀬　茂
教　　諭　青沼一民
主　　事　柳沢みどり
〃　　木村浩二
〃　　篠原信彦
〃　　住藤　洋
〃　　金森安孝
〃　　佐藤甲二
〃　　吉岡恭平
〃　　工藤哲司
〃　　渡部弘美
〃　　主浜光朗
〃　　斎野裕彦
〃　　長島栄一
〃　　荒井　格
臨時職員　高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡—範囲確認調査報告書—（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅰ（昭和55年3月）
第22集　経ケ峯（昭和55年3月）
第23集　年報1（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集　年報2（昭和56年3月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年3月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集　北前遺跡（昭和57年3月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ（昭和57年3月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ—昭和56年度発掘調査概報（昭和57年3月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年3月）
第41集　年報3（昭和57年3月）
第42集　郡山遺跡—宅地造成に伴う緊急発掘調査報告—（昭和57年3月）

仙台市文化財調査報告書第42集

郡　山　遺　跡

——宅地造成に伴う緊急発掘調査報告——

昭和57年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL63－1166